2019年２月24日（日）「アガペーの表裏」

マタイ 22:34-40

34 しかし、パリサイ人たちは、イエスがサドカイ人たちを黙らせたと聞いて、いっしょに集まった。 35 そして、彼らのうちのひとりの律法の専門家が、イエスをためそうとして、尋ねた。 36「先生。律法の中で、たいせつな戒めはどれですか。」37 そこで、イエスは彼に言われた。「『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』38 これがたいせつな第一の戒めです。 39『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。 40 律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。」

【序論】

今日は「愛」という、人間にとっての究極的かつ最大のテーマを扱います。大きなテーマであるとはいえ、私たちは日常的に「愛」という言葉を使っているのではないでしょうか。恋愛中の男女の間で交わされる愛の誓い、配偶者への愛、師匠と弟子の間の愛、友人同士の愛、牧師と信徒の愛、子どもに対する親の愛など、様々な場面で愛は表現されます。しかし、それでは「愛とは何か」と問われると、答えるのは簡単ではありません。また、本当にその相手を愛しているかと改めて問われたときに、愛の基準というものが不明瞭であるがゆえに、100%「Yes」と答え得るものなのかどうかという疑問も残ります。二葉亭四迷は「I love you」を「君の為なら死ねる」と訳したそうです。仮にこの言葉を基準とするならば、私たちは恋人、配偶者、友、家族、そして神のために死ねるかどうかという問いを突きつけられることになるでしょう。

人類が抱える「愛の問題」は、古くから探求が続けられてきています。ご参考までに、古代ギリシャにおける愛の四つの分類をご紹介いたします。

①友愛（philia）　友人の間での信頼や結束の心
②男女愛（eros）　互いに求め合う男女の間の恋愛
③愛着（storge）　親子・兄弟などの血縁における自然愛
④恵愛（agape）　親が子を愛するような、慈悲深い神の無限／無償の愛

今日の箇所で使われている「愛せよ」というギリシャ語は「アガパオー（④）」であり、聖書が求めるところの愛の性質を物語っています。人間世界における「愛」というものが、まことに脆いものであることを知っている私たちに求められる「恵愛」。この果てしなく高い要求に、私たちは果たして応えることができるのでしょうか。

【本論】

本論１．律法学者の質問

しかし、パリサイ人たちは、イエスがサドカイ人たちを黙らせたと聞いて、いっしょに集まった。（22:34）

前回はサドカイ人との復活問答について学びました。主イエスは復活信仰を嘲るサドカイ人をお叱りになり、彼らが正典とする箇所から復活の真理を教え給いました。今日はパリサイ人が登場しますが、パリサイ人にとってサドカイ人は厄介な相手だっただけに、イエスが彼らを黙らせたと聞くと、ほくそ笑みつつもその知性の深さに驚嘆したと思われます。そして、次はどのように罠にかけてやろうかと協議しました。「**集まった**」という表現には、神に言い逆らう諸国の態度、愚かさが表れています（詩篇 2:2）。

そして、彼らのうちのひとりの律法の専門家が、イエスをためそうとして、尋ねた。「先生。律法の中で、たいせつな戒めはどれですか。」（22:35-36）

福音書によって、この箇所の描き方はやや異なります。マルコは主イエスの許にやって来た律法学者を比較的好意的に描いている（マルコ 12:28-34）。しかし、マタイは彼が悪い動機を持って近づいてきたと語ります。律法の中で最も大切な教えが何であるかという問いは、これまた答えるのが難しい。なぜなら、どれか一つを取ると、それと相容れない内容の律法を軽んじたという見方ができてしまい、それが訴える口実となり得る。

実際、おびただしい数の律法を整理するのは大変な作業でした。これも律法学者たちの長年に亘る研究の成果なのですが、律法の中には命令形の掟が 248、禁令が 365、計 613 の掟があると言われていました。その中には、容易に実行できるものと実行困難なものの区別、掟を破った場合に重い刑罰を伴うものと、心の中での悔い改めだけで済むものといった区別があったようです。私たちは「大切にしなくてはならない戒め」と聞く時に何を思い浮かべるでしょうか。恐らく十戒ではないかと思います。十戒には人が生きるべきエッセンスのすべてが詰まっていると言えるでしょう（出 20:1-17）。

①ヤハウェだけを神とせよ
②偶像を作るな
③神の御名をみだりに唱えるな
④安息日を覚えて聖なる日とせよ
⑤両親を敬え
⑥殺すな
⑦姦淫するな

⑧盗むな
⑨偽りの証言をするな
⑩隣人のものを貪るな

十戒は第１～４戒が神に対する義務、第５～10 戒が人に対する義務であると言われます。613 の掟の中から 10 を選び取るということだけでも困難ではありますが、「十戒」は一つの回答となるでしょう。しかし、この律法学者は更に進んで「一つ」を選ぶよう主イエスに求めてきたのです。

本論２．第一の戒め（神への愛）ただ一人の方を（二心なく）

そこで、イエスは彼に言われた。「『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』これがたいせつな第一の戒めです。（22:37-38）

主イエスの答えは明快でした。神を愛することがすべてのすべてにまさって重要であると。それにしましても、「神を愛する」ということを私たちは実際にどれくらい考え、具体化して生きているでしょうか。目に見えない存在を愛するとはどういうことなのか。

主イエスがここで引用しておられるのは、申命記 6:5 の聖句です。ですが、４節から読んでみたいと思います。

聞きなさい。イスラエル。主は私たちの神。主はただひとりである。心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。（申命記6:4-5）

４節に「**主はただひとり**」という表現があります。実は、この言葉に「神を愛する」ということを理解する鍵が隠されているのです。神はただ一人であって、その方だけを神とし、拝まなければならない。このようなことを宣べ伝えている私たちでありますが、この戒めは瞬く間に多神教の考え方とぶつかるのです。日本には八百万の神がいると考えられています。受験の神、子宝を授ける神、安産と子育ての神、浮気封じの神…と。そのために、その目的に合った神社に赴き、祈願をする。イスラエル周辺諸国の宗教も似たところがあり、カナンの肥沃神バアル、アシュタロテ、アシェラ、ペリシテの魚神？ダゴンなど、多くの神々の名前が旧約聖書には登場します。

私は小学生になった頃、初めて世の宗教事情を知るようになりました。由緒ある家のお坊ちゃんと仲良くなりましたが、家に遊びに行くと、ご先祖様の写真が飾られており、仏壇にはいつもお米が供えられ、別室には神棚が据えられていました。キリスト教の土壌しかなかった私にとって、初めて異教と触れ合う大切な機会だったのです。更に、小学校では「山の神」「海の神」「川の神」の話が出てきますし、ガキ大将は「俺は神だ。俺を拝め」と言って威張っていました。このような宗教事情の下にあって、唯一なる神

ヤハウェだけを信じ礼拝するということは、実は並大抵のことではありません。イスラエルには重い要求がなされた。そして、民は幾度もその戒めに背いてしまったのです。

唯一のお方を礼拝するためには、「二心」を捨てなくてはなりません。その他の何者にも目をくれないということです。そして、神を愛するとは、神の戒めに聞き従うということです。十戒の第１～４戒を振り返るとき、私たちは神ならぬものを愛している自分、心の中で偶像を作っている自分（それは金銭や趣味である場合もある）、安息日を聖なる日として真にささげていない自分が示されるのではないでしょうか。すべてに先立って神を第一とすることがまことに妨げられやすい世の中に生きているのです。

人間がただ一人の神を神とできなくなった理由は、ひとえに罪にあると言ってよいでしょう。神の戒めを破ったアダムによって、人は皆「神との契約を破った者の子孫」として生まれてくる。そして、アダムと同様に神の戒めに逆らう性質を持っているのです。「二心」を持っている。これは一神教という価値観の下に生まれた者にとっても例外ではありません。私自身、クリスチャンホームで育ちながら、そして、現在牧師として生きていながら、心が別のものに傾いていることがある自分を知っています。そして、ある時にハッと目を醒ます。神ならぬ者を愛していた自分に恥じ入り、責め、悔い改めるのです。あなたはどんな時にも神に集中しているか。この世のものに心を奪われていないか。神を愛すると同時に別のものをも愛するという器用な真似をしようとしてはいないか。実際、それはできないのです（6:24）。別のものを愛した時点で、私たちの心は神から離れているからです。

神はイスラエルに「戒め」として、ご自分を愛することを求め給いました。しかし、ここで私たちは疑問を覚える。本来、愛とは自発的なものであって、誰かから強制されるものではありません。「俺を愛さないと殺すぞ」と脅して、ある男女が結ばれたとしても、そこには恐怖はあっても愛はないでしょう。しかし、神はそれでも「わたしを愛しなさい」「すべてを懸けてわたしを愛せよ」と言われます。それは、神が私たちを愛しておられるからです。真のアガペーをもって人間一人一人を愛しておられる。元来、人間は同じアガペーをもって神を愛し返すことができたのです。しかし、罪によってそれができなくなってしまった。アダムが「二心」となり、彼から生まれるすべての人の心も「二心」となってしまいました。神のみを見つめることができず、あちこちに目をやって生きている。この日本という宗教事情はまさしくそういうものではないでしょうか。そして、私たちも例外なく、心の中で神以外の何かを愛してしまうのです。それが礼拝を軽んじる姿勢として現れてくる。そのような私たちに根本的な生き方の変革を求めておられる。「わたしを見なさい」「わたしだけを愛しなさい」。そう言われなければ、私たちは自分の「二心」にさえ気づかないのです。

本論３．第二の戒め（人への愛）ただ一人の人を（二心なく）

さて、これで終わりではありません。主は「神を愛せよ」という第一の戒めに続き、間髪入れずもう一つの戒めを並べます。

『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。」（22:39-40）

律法学者は一つだけ答えを要求していました。しかし主は、最も大切な戒めはもう一つある、それは隣人を愛することだと言われるのです。主が引用されたのは、レビ 19:18 の聖句です。

あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。わたしは主である。

主はどうして第一の戒め（神を愛せよ）だけに止(とど)めなかったのでしょうか。それは、神への愛は人への愛となって現れるものだからです。これらの戒めは優劣つけられる類のものではなく、不離一体であり、コインの表と裏のようなものです。夫婦の関係は神との関係を表すとよく言われます。試しに、この言葉を先ほどの「二心」を土台に考えてみましょう。もし男女が「二心」なく愛し合うことができれば、そこに分裂というものは生じないのではありませんか。相手だけをしっかりと見つめ続けていたなら、その夫婦の関係は相乗的に深まっていくはずです。しかし、互いにあちこち（別の異性）を見ながら歩んでいたとしたら、その関係には亀裂が生じ始めるでしょう。いえ、「別の異性」だけではありません。仮に、それが「自分自身」だったとしてもです。私たちは自分のことしか見えなくなり、相手を見失うということがある。これは先ほどの「神を愛する」ことと非常に通ずるところがあります。神はご自分だけを見つめていてほしい。しかし、人は神を愛すると言いながら、別のものばかりに目を向けているのです。心に分裂がある。同じように、人は配偶者以外の何かに目を向け、見えない心の溝を作り出し得る存在なのです。人格以外のものを愛するということもある。

どこの国でも家族というコミュニティが存在し、夫婦の結びつきがあります。しかし、同時にどこにおいても分裂が起こり得ます。この問題は、実は小手先だけの方法論によっては解決することができません。その根本のところに神との関係の問題があることを聖書は教えているのです。そもそも、男女の関係にヒビが入ったのはいつであったか。それは、人間が罪を犯した時ではなかったでしょうか。神の戒めに背き、アダムもエバも自己中心となり、自分自身を神として歩み始めた。その瞬間、男と女は互いに自分の真の姿を見せることができなくなったのです。自分の愛に不純なものが入り混じっていることを相手に知られたくないという本能が生まれた。いちじくの葉を綴り合わせて大事なところを隠した。これは、自分の本当の姿を相手に見られたくないという心の闇を

象徴的に表す行為でした。

救いは、神との関係を修復し、人との関係も修復します。人は自分の罪を言い表して救われます。これは、自分の中に不純な心があるという事実を認めることを意味するでしょう。今まで自分は神に対しても人に対しても、心において真実を尽くしてはこなかった。そのことを認め、罪を悔い改めるのです。そして、罪は光の下に晒され、光そのものとなる。そこから何が始まっていくかというと、真に神と人とを愛する人生なのです。失われていたアガペーが取り戻されていく。救いとは、ただ単に死後の命が保証されるというものではありません。極めて現実的な救いであります。罪のなかった頃、アダムとエバがエデンの園で神と自由に交わり、互いに純粋な愛を注ぎ合っていた状態に戻されていくのです。そして、この関係は夫婦だけでなく、すべての人間関係にまで波及していくものとなるでしょう。

【結論】

人間には「愛に応答する」という能力が備わっています。しかし、生まれながらの人間は、自分に良くしてくれる相手に対して応答はできても、自分を憎む相手を積極的に愛するということはできません。それができたのは主イエスただお一人であります。主イエスはご自分を愛さぬ者（私たち）をも愛してくださいました。そして、その尊い命を私たちのために投げ出してくださいました。その真のアガペーを受けた者、それを理解し、受け止める者には、同じアガペーが与えられていく。いえ、取り戻されていくのです。そのアガペーをもって神を愛し、同じ神が創造されたすべての人を愛するようになっていく。これが救いの目的であります。

【祈り】

私たちを愛してくださっている天の父なる神様。私たちの中に潜む二心をお赦しください。あなただけを見つめ、あなただけを愛する者となりたい。そして、あなたを愛するように隣人を愛する者ともなりたいです。それを妨げているのは、まさに私たちの罪です。どうぞこれを取り除け、エデンにおいてアダムとエバが経験した自由な愛を、私たちの人生にも実現させてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
歪みなきアガペーをもって、罪ある者を愛し給う、父なる神の愛。
愛を教え、行ない、現実となし給うた、主イエス・キリストの恵み。
二心なく、真の自由をもって、神と人とを愛させ給う、聖霊の親しき交わりが、
我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。